

一八八 山頭に花を摘み、溪^{けい}辺^{へん}に魚を釣る。読書の余暇は、時に或ひは放意これを為すを妨げず。

山頭摘花、谿邊釣魚、讀書餘暇、不妨^レ時或放意爲^レ之、

【訳】山の裾野で花を摘み、谷川のほとりで魚を釣る。読書をした後の時間は、時にはこのように自分の意のおもむくままに過ごす。

一八九 書を読むに方^{あた}りては、專精^{こつこつ}砭^つ砭^つ。意を放^{あた}つに方^{あた}りては、歩みに信^{まか}せて従^{しやうよう}容^{また}。亦正にいわゆる一^{いつ}張^{ちやう}一^{いつ}弛^しの道なり。

方^{ほう}讀^{どく}書^{しよ}也、專^{せん}精^{けい}砭^つ々、方^{ほう}放^{はう}意^い也、信^{しん}步^ふ従^{じゆ}容^{よう}、亦正所謂一^{いつ}張^{ちやう}一^{いつ}弛^し之道^{だう}、

【訳】書物を読むときには、一生懸命ひたすらに読む。心を解放するときには足の向くままに歩いてゆったりとする。これが、心を張りつめたり、弛めたりする（一^{いつ}張^{ちやう}一^{いつ}弛^し）方法である。

一九〇 古人云わずや、「父母は惟^{ただ}其^{その}疾^{やまい}をのみこれを憂^{うれ}う」と。此の話偏^{ひと}えに爾^{なんじら}輩^{はい}黙々として参^{さん}透^{とう}し得^え去^さらんことを要す。

古人不^レ云乎、父母惟其疾之憂、此話偏要^二爾輩黙々参透得去^一、

【訳】論語の中で、孔子がこう言っているではないか。「父母はひたすらに我が子の病気のみを心配している」と。だからこの話をひとえに心にかけ、体に注意して健康であることが親孝行である。このことを、みなさんはよくよくかみしめて、肝に銘じておきなさい。

一九一 古今の和漢の史籍は、博く読まざるべからざるも、惟^{ただ}識^しあるを要す。然れども学に由^よらざれば、則ちいはゆる識^しは、特^{ただ}利^り害^{がい}成^{せい}敗^{ぱい}の機^{あき}に察^さらかなるのみにして、綱常徳義の本には略^{りやく}なり。学^{がく}ぶ者は苟^{いさ}くも綱常徳義の本に略^{りやく}にして、専ら利害成敗の機^{あき}に察^さらかならば、則ちいはゆる利害成敗の機も、亦恐らくは其の要領を得ざらん。

古今和漢之史籍、不可不博讀也、惟要有識、然不由學、則所謂識者、特察
於利害成敗之機、而略於綱常德義之本、學者苟略於綱常德義之本、而專察於
利害成敗之機、則所謂利害成敗之機者、亦恐不得其要領、

【訳】古今の日本や中国の歴史書は、広く読まないといけないが、それには正しい判断力が必要である。しかし、その判断力は学問によるものでなければ、ただ損得や成功失敗の時だけに役に立つものになってしまう。それは、人として行うべき道徳やその大本には役立たない粗末なものだ。学ぶものが、そもそも人の道の大本を粗末にして、もっぱら損得成功失敗の時に明らかにしなければいいというなら、損得成功失敗の時でも、恐らくはその要領を得ないものになってしまうだろう。

一九二 此の間、一学者曰く、「学は実なるを要し、用に適するを要とするは固よりなり」と。然れどもいはゆる実なるもの、いはゆる用に適するものは、亦各指す所あり。弁ぜざるべからざるなり。彼の輩は則ち心の理を舍きて、事物を逐い、自己本分の功夫を略し、而も専ら家国天下の上に向いて、商量講究し、此れを以つて実と為し、此れを以つて用に適すと為す。天下の本は国にあり、国の本は家にあり、家の本は身にあり、正心誠意は是れ即ち古来聖賢の相伝にして、真箇の実用の学なるを知らざるなり。

此間、一學者曰、學者要實要適用、固也、然所謂實者、所謂適用者、亦各有所指、不可不辨也、彼輩則舍心理、而逐事物、略自己本分之功夫、而專向家國天下之上、商量講究、以此爲實、以此爲適用、不知天下之本在國、國之本在家、家之本在身、正心誠意、是即古來聖賢相傳、真箇實用之學也、

【訳】先頃、ある学者が言っていた。「学問は実用的なことが大事で、役に立つことを必要とするのは当然だ」と。しかし、実用的とか、役に立つとかいうのは、それぞれ指し示すところがある。しっかり議論をしなければならない。彼らは、人の心の問題を捨てて、事物についての追求のみをやり、実際に自分が当然しなければならぬ実践の工夫をしない。それは家や国や天下のことを考え、こういうことを持つて、実用的なこととし、役に立つことだとしている。しかし、天下の本は国にあり、国の本は家にあり、家の本は自分自身にあるのだから、まず自分の心を正し、誠の心を持たなければならない。これは昔から聖賢の伝えてきたことであり、これこそ本当の実用的な学問だということを知らないのだ。

一九三 書を読み大義に通ずる、是れ亦固に然り。惟夫れ聖賢の、訓えを垂るるや、義精旨微にして、甚だ窺測し易からざるものあり。而れども学ぶ者輕輕に卒読し、容易に看過し、自ら以つて大義に通ずと為す。吾は則ち敢へて然りと謂はざるなり。

讀書通大義是亦固然、惟夫聖賢垂訓、義精旨微、甚有不易窺測者、而學者輕々卒讀、容易看過、自以爲通大義、吾則不敢謂然也、

【訳】書を読み人の道を理解する、これは当然のことである。ただ、聖賢が教えを述べていることは、意味が詳しく細やかで、あれこれと推測することは難しい。しかし、学ぶものは軽々しく読み終え簡単に目を通し終わり、それを持って人の道を理解したとする。私はそんなことをあえて、よしとは言わない。

一九四 学者又云ふ、「日本紀・万葉集は、我れの詩書なり。学ぶ者は寧ろ詩書を読まざるべく、此の二書を読まざるべからざるなり」と。蓋し詩書は其の始め未だ聖人の刪定を経ざれば、則ち固より日本紀・万葉集なり。既に刪定を経れば、則ち復たこれを以つて比擬すべからざるなり。而して学者爾云ひて、以つて日本紀・万葉集を称すれば則ち可なり。抑恐らくは其の聖人の述作を視れば、かくのごとく輕易卒略なるべからざるなり。

學者又云、日本紀萬葉集、我之詩書也、學者寧可不讀詩書、可不讀此二書也、蓋詩書其始未經聖人刪定、則固日本紀萬葉集也、即經刪定、則不可復以此比擬也、而學者云爾、以稱日本紀萬葉集、則可也、抑恐其視聖人述作、不可如是輕易率略也、

【訳】ある学者はこうも言っている。「日本書紀や万葉集は私の詩書である。学ぶものは、詩経や書経を読まないで、この二書を読むべきだ」と。確かに、詩経・書経はその初めは孔子が編集したものではないから、日本書紀や万葉集みたいなものだ。その後、詩経・書経は孔子の編集を経たものだから、日本書紀や万葉集には比べることはできない。学者こう言つて、だから日本書紀や万葉集を読めばよいと言っている。しかし、孔子が取捨編纂し、人の道や言説を述べ伝えたものをみれば、このような軽々しく粗末なことを言つてはいけないのだ。

一九五 春來たり雨沢多きに過ぐれば、耕稼に害あり。生民の艱食甚だ慮るべきなり。おもんばか

春來雨澤過多、害於耕稼、生民之艱食甚可慮也、

【訳】春が来て雨が多すぎれば、穀物の植え付けにも害がある。人々の食べ物不足にも心配するべきだ。

一九六 身漸く老いに迫り、生理漸く困に就く。生を楽しむの念甚だ少くして、亡聊の感常に多し。吾窮民の情を察するに、大抵皆然り。ようや

身漸迫老、生理漸就困、樂生之念甚少、而亡聊之感常多、吾察窮民之情、大抵皆然、

【訳】自分はだんだん老いがせまり、体も疲れた状態になってくる。生きているとことを楽しむという思いはだんだんなくなり、憂いの思いが多くなった。生活に困窮人の思いを察すると、たいていみなこのような思いで過ごしているのだらう。